

述懐（蒲生君平）

丈夫 生まれて 四方の 志 有り

千里 劍書 何れの 処にか 尋ねん

身は 轉蓬に 任せて 遠近 無く

思は 流水に 随つて 幾たびか 浮沈す

笑つて 樽酒を 見て 狂 先ず 発し

泣いて 離騒を 読んで 酔後に 吟ず

唯 太平 恩沢の 渥きに 頼つて

自ら 章句を 将つて 青衿に 托す

丈夫生有四方志 千里劍書何處尋
身任轉蓬無遠近 思随流水幾浮沈
笑看樽酒狂先發 泣讀離騒醉後吟
唯頼太平恩澤渥 自將章句托青衿

解説 山陵志の調査のため、諸国を遍歴した旅を回想しながら、このように無事に生きることの出来るのも太平のおかげであると述懐して作られたもの。

語釈 ※丈夫 一人前の男子。 ※四方志 あらゆる場所に理想を求めて旅をしようとする志。 ※千里 ここでは長い遍歴の行程を千里といった。 ※劍書 刀劍と書物。 ※何処尋 いずれの所を捜したらよいのだろう。 ※轉蓬 枯れて風に吹きたおされたよもぎ。 あてのない調査遍歴のさまにたとえる。 ※思 陵墓を慕い思う気持ち。 ※随流水 流水のながままに。 ※幾浮沈 浮き沈みを繰り返す。 ※笑看樽酒 遍歴のつらさも酒をみるとしばしの笑をさそう。 ※狂先發 安らぎと解放感にまず狂態を演じる。 ※泣讀離騒 中国の戦国時代、楚の屈原の詩で、讒言によって王に追放され、失意のあまり投身を決するまでの心境を夢幻的にうたったもの。 を読んで感激の涙を流す。 ※酔後吟 酔ったのち離騒を朗吟する。 ※太平恩沢 天下がきわめて平和におさまり、それによって受けるめぐみ。 ※渥 うるおうこと。 ※将 頼もつて。 ※章句 句詠を教えるということ。 章句の学の意味。 ※青衿 学生をいう。

通釈 男子と生まれて尊皇の心やみがたく四方遍歴の志をいただき、千里も離れた遠方まで劍と筆硯を持って、あてどもなく陵墓を尋ね歩いた。 わが身は風になびく枯れ蓬のように、遠くまた近く放浪し、一筋の思いは流水に浮沈する浮遊物のようになまよっている。 しばしの休息に酒を見ると笑いが込みあげ、狂態がまずおこり、憂国の士、屈原の離騒を讀んでは涙流し酔吟する。 もっぱら、太平の世の恵みの厚さのおかげで「章句の学」を学生に教え、彼らに理想を托している。